

『石神組御用留』に見える東海村の民俗行事を中心に

佐藤美智子

はじめに

石神陣屋は、石神外宿塚越に享和 2 年（1802）に建てられ、郡奉行所が在地に着任し農民の直接支配が開始された。今回明らかになった文化六年の支配地は 85 ケ村で、現在の東海村は 12 ケ村が該当する。即ち石神外宿・石神内宿・石神白方・石神豊岡（旧北河原村）・亀下・竹瓦・舟石川（石川村）・船場・須和間・村松東方・村松西方（幕末には村松村となる）・照沼（寺沼）である。村松村が 2 村に分かれている以外は全て現在の大字にあたるのが江戸期の村であった。

この石神陣屋の郡奉行には当時 2 代目として加藤孫三郎が就任し、彼の文化 6 年の活動記録が、この御用留となっているのである。

ここでは、この御用留に記されている東海村に係る民俗行事と農民の生活に関する内容を、以下に報告するものである。尚「石神組御用留」の記述を基に「照沼家御用留」など他の資料も使って補足してまとめた。

1、村松大神宮及び村松虚空蔵堂に係る正月行事

1.1 明神御戸開

「石神組御用留」における村松大神宮の正月行事の記録は、正月 15 日の筒粥と村松阿漕浦の御綱曳が、共に 15 日付けで行われていることが短く記されているのみである。しかし村松の大神宮では 1 月 7 日に御戸開が行われているので（7 日正月）、一連の正月行事はここから始めたいと思う。

御戸開の記録は「文化 2 年村松西方村御用留」（照沼家文書）に詳細が記録されており、正月 7 日午上刻（午前 11 時過頃）に行うと申し伝わっている。西方村庄屋倅熊次郎と東方村庄屋倅栄十は袴羽織の正装で宿内へ行き待機している。村松虚空蔵堂の正別当である龍蔵院と脇別当の龍光院も御宮へ詰めるのだが、今年は龍蔵院が病気のため不参加である。午上刻過ぎに大宮司より御沙汰があり別当方と庄屋の倅共が宮へ詰めた。また定夫（村の仕事をする東西各一人の小使さん）も煙の火などを持って待機している。宮の東西に薄べりが敷かれ東側には龍蔵院、西側へは龍光院が着座する予定であったが、今年は龍蔵院が病気なので西側だけに薄べりを敷いて着座した。

この儀礼は今も一部で継続されており、その辺りを『東海村史・民俗編』から見ると、御戸開祭りは 1 月 7 日に村松大神宮の外宮である豊受皇大神宮（白方）・住吉神社（石神外宿）・住吉神社（須和間）では行われている。白方の豊受大神宮での御戸開祭は、氏子の方々へ知らせを出し、氏子代表と参加出来る人々と共に行われている。しかし、現在村松大神宮では行われていない。これは信仰地の拡大によって、地域神を越した信仰を受ける立場となり七日正月は消滅していったものではなかろうか。

須和間の住吉神社のかつての「御雇開」は村史に更に詳しく記載されている。須和間のもと「諏訪間」又は、「洲浜」と書き、上の諏訪・下の諏訪明神の 2 社があり、その中間に住吉神社があったので村の名に付けたとある。一方、かつて海に続く真崎浦が神社近くまで侵入していたため「洲浜」と名付けたのであろうと言われている。『新編常陸国誌』『水府誌料』。七日正月をする地方では 6 日までを物忌（^{ものいみ}斎戒）の期間とする場合が多い。7 日まで神様が寝ておられるので、その間は音をたてないようにしていたという。7 日午の刻（午前 12 時頃）になると神職と鍵守の河野家の当主と本家筋の塙家の当主の三人によって行われる。河野家は東（本殿に向って右）塙家は西に座して始まる。祈祷の後に神職が開扉する、開けるのを待っていた村人が「一番山をふむ」と言ってお盆一枚位の鏡餅を持ってお参りしお札をもらって帰るという。神社と村人の係り方は、その土地の草分けの家と神社との関係を現しているのではないだろうか。ただ、以前はこのように行われてきたが、現在は鍵守の方々の参加は無く氏子代表によ

て行われている。

また、白方や石神外宿等で後々までこの行事が残っていた事は、農村形態が良く残った場所であり、新住民との住み分けや融合が割合うまくいったためと思える。それは神を敬う心が土地の人々により受け継がれて来たことが最も大切な要素だったと共に、その土地の方々と共に歩んだ神職の方の存在も忘れてはならない事である。

1.2 阿漕浦綱引

覚 鮒貳拾参枚 但壹尺貳寸より八寸迄 右、村松阿漕浦にて、昨十四日一網為曳候所、前書之通懸り候二付、 神官へ相渡申候、尤寺社方よりも可申上候へ共為御心得申出候、 以上 正月十五日 加藤孫三郎 右御用人衆へ
--

以上が石神組御用留に書かれている全文である。

阿漕浦の綱引きは寺社方と郡方が立会いの上行われていた。

阿漕浦については、「五所明神の御手洗と申伝へ、魚漁を禁ず。只正月十三日網を下し魚を得て神供とす」と『水府志料』にある。また、「あこぎ浦、伊勢阿漕になぞらへ、毎年正月十五日朝綱つゝ引候様、元禄十丑正月被仰付候」と『加藤寛斎随筆』にある。『東海村史・通史編』には、「鎮守開基帳」によれば寛文 3 年には村松五所大明神とあり、神領として 23 石を受けていたとある。また『村史・民俗編』では元禄 7 年（1694）水戸光圀は神殿を造営し、同 9 年（1696）伊勢より分霊を奉還し大神宮と称するようになったとあり、以前は照沼地区（現八龍神社）にあったようだ。

尚阿漕浦の名称については、伊勢の阿漕浦は外洋であるが御留川（伊勢神宮への神供の浦）なので、当該の沼も同様に阿漕浦と名付けられたのであろう。

1.2.1 照沼家文書の御綱引 1

次に「文化 2 年村松西方村照沼家御用留」で御綱引きがどのように行われていたのかをみてみよう。

13 日 御寺社方御立会様榎村伊衛門様が袴羽織にて大宮司方へ七ツ時分（午後 3 時頃）に入る。また御郡方御立会様菊池伍介様も同刻頃東方庄屋方へ入る。暮方に大宮司より時分使が 2 度位も来たので、庄屋の案内で定夫にちょうちんを持たせて御立会様は大宮司方へ行く、庄屋は定夫を置いて帰宅する。夜に寺社方と郡方役人に対し大宮司方より御饗応があるが、村役人に対しては近年御饗応が無い。夜は寺社方は大宮司宅へ泊り、郡方は東方庄屋宅に泊る。これは上の 15 日は村松東方村が勤め、下の 15 日は村松西方村が付番になるためである。

14 日朝 御寺社方御立会様役人は卯の上刻（午前 6 時頃）に大宮司宅より阿漕浦へ出かけ、御郡方役人も同刻に東方庄屋宅より阿漕浦へ出向く。この時両庄屋が袴羽織で御案内をする。但し、他用がある時は組頭や倅が代わりをすることもある。

玉造村漁師彦兵衛と柏崎村の漁師政十が 13 日夕方宿所の村松宿西方庄屋宅に到着する。七ツ時（午後 4 時頃）に網を立てる。この網は田伏村より玉造村へ届けられる。他にも水主が網を持参して来ており、また持ち帰る。船は村松宿より毎年出され船頭は善十が勤める。阿漕浦までの舟かつぎ人足は 13 日は東方村が出し、14 日はかつぎ頭と人足は西方村より出す。またお宮までの魚かつぎも西方村より出す。漁師彦兵衛と政十が 14 日朝に網を揚げて取った魚は御

立会様へ御覧に入れ直に神前へかつがせる。下社家衆が魚の寸法を測り記録する。御立会様方は御拝殿に薄べりを敷いた上に座す。魚を神前へ備え御祈祷の後、大宮司よりお酒等をいただき夜明け方に大宮司宅へ下る。例年通りの御饗応もあった。これは村役人へも下された。両御立会様へ庄屋が阿漕浦の漁高を延紙横折に書き指上る。

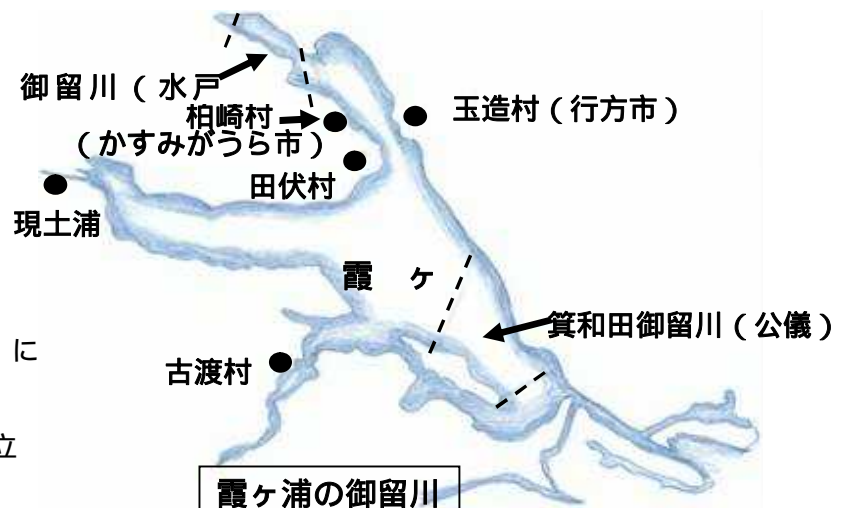
覚

- ・さい 三本（さいとは^{ふじい}鯉のこと）
但シ、壹尺壹寸より壹尺三寸五分迄
- ・鮒三拾枚
但シ、壹尺より壹尺一寸迄
- ・鯉 七本
但シ、壹尺三寸より壹尺六寸五分

右、阿漕浦漁高、前書之通り相改、無相違書付指上申候、以上
文化貳年 村松西方村
丑正月 庄屋市郎左衛門 印
同 東方 庄屋六左衛門 印
玉造村
漁師彦兵衛
柏崎村
同 政十

御陣屋建立以前は御郡方様が直接御配符にして水戸の御役所へ報告していたが、当地に御陣屋が出来てからは、15日の筒粥に出席してから、その結果と共に両方一緒に提出するようになった。両御立会様に対しては御饗応があり、龍蔵院と龍光院が隔年交代で接待にあたるが、今年は龍光院が当番で村役人が両御立会様を御案内するが、村役人に対しては近年御饗応が無く、宿内の組頭宅に於いて御立会様の御出立を待っている。定夫は別当衆方へ控えさせておくが、賄（食事）はない。寺社方御立会様は御饗応後お帰りになるが、時間が遅くなったときは大宮司方へ泊ることもある。帰る時は大宮司がその年の魚の取れ高に応じて、魚を差し上げている。御郡方御立会様は明日の市にも立会うので東方庄屋宅へ御泊りになる。

以上が文化2年正月に書かれている御網立の様子であるが、なぜ阿漕浦の御網立の網は田伏村から玉造村へ届き、玉造村と柏崎村の漁師が水主に網を持たせて村松大神宮まで来るのであろうか。同様のことが『東海村史・民俗編』には、寛政6年（1794）と寛政7年（1795）に玉造村と柏崎村より網立



人が来たとあり、『東海村村史・通史編』にも文化 4 年、5 年（1807,8）に玉造村と柏崎村から漁師が来ているとあるので、間違いなからう。

1.2.2 照沼家文書の御網引 2

文化 2 年の御用留には面白いことも見られる。

同年閏 8 月 23 日郡奉行加藤孫三郎が大検見の為阿漕浦を訪れた際、次のお尋ねがあった。

「阿漕浦は殺生を禁じた御留川か、また神罰を恐れているのか」

そこで案内した庄屋が村松大宮司方へ尋ねたところ下記の様に申し出があった。

「五所明神は大同元年の創建で、その後、元禄年中に源義公様がお出でになり神体上覧之上天照大神に再興され、現在の場所は良くないので七里松原へ移し建てるようと寺社奉行の佐野八兵衛殿と村嶋与平次殿の 2 人に申し付けた。しかし義公様はその後病気が重くなり御逝去されてしまった。また義公様は当社の儀を至極信仰されて時々お出でになり「阿漕浦八不思議の池ナリ誠ニ神川」との上意があった。」

この川で殺生や不浄の手足を洗ったりすると不思議ことが起こる。元文 4 年末(1739)正月に網引の漁師の乗った舟が川中で止まり 4、5 回も廻され絶対絶命となった。見ていた御立会様が大神宮の神前へ右の次第を告げると、大宮司が「抽丹誠」を神前で祈ると、漸々舟が前へ走り網を揚げることが出来た。助かった漁師は途中で甚だ不浄になった様子を語った。誠に神罰を受けたのだと見える。

元禄 10（1697 年）丑正月 14 日、15 日大祭礼の懸魚を致す様にとの上意が有り、隣郷北河原村(石神豊岡村)から網を取寄せて網引をしたところ 1 匹の魚も入らなかった。また翌寅年（元禄 11 年）正月には湊御殿より網を取寄せて網引上覧したところ、さい 7 本、平鮎 3 枚が入っていた。次の卯年（12 年）には南郡石崎村と同玉造村・同柏崎村の 3 ヲ村に仰付られ、立網 98 反、水主 5 人湊より水手衆 8 人が呼ばれ、上覧にて網引きを行い、魚数 57、内鯉 4 本、平鮎 6 枚、さい 47 本が入った。殿様はお祝なされ永く右村へ網引役を命令された。只今は両役所が御立合をし、年々間違いなく懸魚を供えている。

さらに「文化 3 年西方村/照沼村兼帯庄屋御用留」には、14 日の御網立には、鮎 11 枚と鯉 1 本が入ったと、両庄屋と玉造村漁師新兵衛・柏崎村漁師幸十より届けが出されている。そして東方村庄屋六左衛門は、過去の話として、13 日に大嵐となり阿漕浦へ網立の船を出せなかった。翌 14 日朝に網を立てたところ小鯉が 1 本入っただけだった。そこで御掛りの江橋吉衛門様に承ったうえで丁度真崎浦の鯉鮎運上の時節だったので鯉を 2 本買い上げて何とかしたという事です。と書かれている。日付の定まった儀礼を行うには天候という大前提があり、庄屋や遠路から来る漁師達の往昔の苦労がしのばれる。

御網引きに霞ヶ浦からはるばる来た三ヶ村とはどんな村だったのか、また村の位置はどうだったのかを見ると、当時霞ヶ浦には「津」と呼ばれる漁業に基をおく自治的連合組織があり、「霞ヶ浦四十八津」と「北浦四十四津」が江戸初期には成立していた。霞ヶ浦四十八津は北の津頭玉造浜村と南の津頭古渡村を中心にして、組頭とその下に小津頭が置かれ伝達及び寄合の組織として備っていた。玉造村（北津頭）田伏村（組頭）柏崎村（小津頭）の三ヶ村は（同一組内かどうかは不明）阿漕浦の村松大神宮への網引の儀礼に出かけることを霞ヶ浦四十八津の力を発露する機会としてとらえていたので

はないか、そのためその儀礼は文化年間に至っても引き継がれていったのであろう。

1.2.3 御網引は玉里村から 『水戸歳時記』

立原翠軒(1744～1809)は御網引きは玉里村から来たと述べている。(『水戸歳時記』秋山房子編) 翠軒は、水戸藩大番組立原甚蔵の長男として生まれ、長じて水戸藩の史局彰考館に入り、後に総裁となった人物である。多くの書籍を残しているが、『玩愒餘録一名観光紀節』というきわめて簡潔な漢文版があり、その和文版が『水戸歳時記』といわれ、翠軒が少年時の作ではないかとも言われている。秋山氏は明和から安永頃の作と考えている。水戸地方の風俗や年中行事についてかなり詳細に書かれている。そして網引きについては：

「村松アコキ浦(阿漕浦)ニテ縄(網か)引アリ。縄打ハ玉里村ヨリ来リ、寺社手代立会ニ出、中流ニテ打也。一打計ナリ、トリタル魚ハ明神ヘ備(供)フ。トリタル魚の数ナト委シク録シテ上呈ス、此魚極テ片目眇ナリ。此浦ニハ主アリ。一年一度ナラテハ縄引コトアタハス。ヒソカニ引モのアレハ必崇アリト云。」とある。「この魚極テ片目眇ナリ」以降は歴史とは関係なしの伝聞としても当村内に広く知られているところである。この前文中事実と違うのは、網打が玉里村となっていることである。ではなぜ翠軒は玉里村としたのであろうか。玉里村は現在の小美玉市にあたり、霞ヶ浦の東側最北の地にある。先に述べた如く霞ヶ浦は四十八津の入会の海として来た。しかし幕府は蓑和田浦を御留川(幕府専用漁場)とし、次いで寛永2年(1625)に水戸藩も玉里地先の水域を玉里御留川に設定した『玉里村の歴史』。これは豪農鈴木七左衛門が、この玉里の入海に東西の境を定めて「御留川」にしたいと水戸藩に願い出た。対して四十八津方は「湖は入会」であると反対し幕府に訴え出たが四十八津方は負けてしまった。ために玉里沖の霞ヶ浦高浜入漁場は水戸藩専用の漁場「御留川」となり、七左衛門はその功績により鈴木主水と改名を命じられ御川守となった。

そこで立原翠軒は阿漕浦が御留浦であったため、当然そこへ来る漁師は御留川である玉里村から来るものと勘違いをして玉里村よりと書いてしまったものと思われる。但し実際は霞ヶ浦四十八津の北の津頭の玉造村と小津頭の柏崎村が来ていたのは先の通りである。

1.2.4 野上家文書(村松虚空蔵堂正別当・龍蔵院)御網引

村松虚空蔵堂正別当であった野上家の文書に、井上玄桐から龍蔵院宛の正月8日付の短い手紙がある。その全文は「当月十四日 如去年あこぎ浦ニテ網引被成候 去年八渡辺悦之進を被遣候へとも今年八誰も被遣まじく候 貴院其辺之様子能御覧被置候而 西山へ書付被指上候様二との仰御座候 以上 井上玄桐 正月八日 龍蔵院」とある。

この手紙は太田西山荘から井上玄桐が光圀に命じられて出したものと思える。井上玄桐は儒学者にして医師、光圀の側近くにいつも仕え、光圀の代筆をする人としても知られている。

元禄10年に光圀公が網引の盛儀を整えた阿漕浦の様子に対して、今年は誰も行けないので後で知らせて来るようにとの内容であり、昨年出向いた渡辺悦之進は御徒で西山詰の家臣の一人である。光圀は13年12月6日没であることから、この手紙は11年から13年正月の間に書かれたと思えるが「日乗上人日記」によると光圀公は元禄12年閏9月13日、「虚空蔵堂、村松明神所々御一見あり、まさきが浦、あこぎが浦など御覧すとある。」光圀公は13年3、4月頃には食も進まなく5月末から6月に体調が少しもち直したが12月に亡くなっている。寺社方と郡方役人の他に光圀の

側近も綱引には立会い光圀の定めた儀礼が滞りなく執行されていたかどうか、自身の側近を通じて、直接報告させていたことが知れる。

1.3 御筒粥

「文化6年石神組御用留」には加藤孫三郎が御用人衆へ正月15日に筒粥を例年通り行ったという書状と9郡の郡奉行宛の筒粥が行われた旨の廻状がある。

書状には：

村松大神宮御筒粥					
早稲	八分	中稲	六分	晩稲	七分
麦	七分	粟	七分	大豆	六分
文化六年巳正月十五日 村松					
大宮司印					
村松五所明神筒粥、例年之通神官より指出候間、					
入御覧申候、以上					
正月十五日 加藤孫三郎					



右、御用人衆へ本書之俚指出ス・・・とあり、また廻状には、「別紙写之通、村松大神宮筒粥、例年之通役所へ指出申候間、皆様御心得二懸御目申候、御順覧可被下候、 以上」とある。

1.3.1 「文化2年照沼村御用留」には1月15日の大神宮での御筒粥についてもかなり詳細に書かれている。それによると文化元年村方御掛りが田山新三郎様に替わった。従来のやり方を尋ねられたので委細を申し上げた。「筒粥の歩附（出来高評価）は従来私共（村役人）も参加しておりましたが現在は社家衆で行っております。そこで歩行夫だけ詰めさせ結果は歩行夫が東方村庄屋宅に居る御立会様にお知らせ致します」と申し上げると、田山様から「上江指上候品歩行夫二而取扱候段八不宜候、仍而歩行夫相止メ来正月より組頭之内西方より指出置筒粥歩附等出来次第急キ東方庄屋宅我等泊り之宿へ持参可為致候、その時は村役人は袴羽織の事、結果は我等より配附二而相送り候」とある。尤も「御陣屋御建被遊候以後御陣屋へ御送り被成候」とあり、筒粥神事が社家衆ばかりで行われ村役人達が行事から遠ざけられており、また、来年からは上への報告を届けるのに、小使ではなく村役人が袴羽織の正装で行うようにと御掛り様より申し渡されている。石神に陣屋が出来てから郡役人により儀礼がより丁寧に行われるようになったことがわかる。

この年文化2年の歩附は、

早稲	五分	中稲	八分	晩稲	六分
麦	七分	粟	八分	大豆	六分

の結果であり実際の収穫はどうだったのだろうか。

1.3.2 次に『常陸国水戸領風俗問状答』『秋山房子編』について見てみたいと思う。

本資料は天理図書館に架蔵され、写本はない。文化末年頃に屋代弘賢が友人達とはかり、各地の風俗を収集することを計画したことによる。その目的は『古今要覧』という幕府編纂事業の

資料の一つとして考えられたものであろうという。「諸国風俗問状」に対する答えである。著者は立原翠軒ではないかとの推定もあるがはっきりしないと秋山氏は述べている。

正月「十五日、村松という所に虚空蔵の縁日にて、遠近郡衆す。城下より恵方にあたる時八別て参詣多し。此所に御筒粥といふ事有、村老集まりて、青竹の筒にて粥を煮る。一歳諸穀の豊凶を占ふ、紙札に即して札守の如し。真中二八、村松虚空蔵御筒粥と記、左右に粳^{うるち}十分、糯^{もち}(米)八分、大麦七分、小麦九分など、其年のあたりはつれを、大小豆、粟、稗等に至る迄、^{ことごと}悉く分付をして出す。人々土産にす」とある。次に「蓋筒に幾つも赤豆と米を入れて、かねてより是は麦、是は大豆と銘々に印をつけて煮かけて二て分付をすると見ゆ 頗る相合かと見えて、農家二ては居間の柱などに張付けて、兼日(日頃)心得に守有様なり」とある。1月15日は本来大神宮の祭礼で公式行事として大宮司(社家)が行っていた。そのうち虚空蔵尊への人々の信仰の高まるにつれ、虚空蔵堂に於いても縁日と考え、行われるようになったのではないかと。それは筒粥の記載内容が大神宮とは異なっており、村老が集まって筒粥神事をしていたと『常陸国水戸領風俗問状』を読んでもよいのではないかと。

1.3.3 更に「文化3年照沼村御山横目御用留」寅十月に次の様な記事がある。

「乍恐書付ヲ以御内々奉申上候」という御山横目の届けである。それによると村松虚空蔵の堂内で来る11日より17日迄七夜修行があると右堂内に張り紙があった。尤も先年も右等之儀があつて、老人共が寄合つて^{念仏}等をやっていたと聞いています。村役人の届出などはありませんが、時節柄でもありますので内々お知らせ致します。という石神組郡方手代の安島政衛門宛の報告である。以上のことから、虚空蔵堂内には村老が集まり彼等の意とする行為が成されていることが知れる。このことから虚空蔵堂内における村老の筒粥は実施されていたと考えてよいと思える。

更に『日本民俗事典』によると「現在筒粥神事として残っているものは、おおむね神社で催されるものが多いが、かつてはムラで共同で行ったり、一族の本家で行ったり、あるいは各家でなされていたと思われる。」と書かれている。何等虚空蔵堂で村老が行っても問題は無く風俗にかなっていると言えるのではないかと。

当村では今も村松皇大神宮の外宮とされる豊受皇大神宮では筒粥神事が15日に行われている。

昨平成20年正月の占いは、稲作(早稲・中手・晩生)と芋類は「豊」麦作(小麦・大麦)は「並」との占いが出たそうである。ちなみに昭和61年に再開された時は昔通りの分付^{ぶづけ}で発表された。早稲八分、中稲九分、晩稲七分、麦七分、小麦六分、煙草六分であった。『東海村史・民俗編』今後共、豊受皇大神宮で継承される筒粥神事は昔通りの分付で発表される事をついつい願いたくなる。

1.4 十五日市御立会

村松の市についての記述は「石神組御用留」には無いが、大切な行事なので「文化貳年西方村御用留」の概要を述べておく。

1月15日村松では御綱引きの後大きな市が開かれた。水戸藩の許可の元に市が開かれていたのは、この近辺では太田村と湊(月に6度(『国用秘録』上))であった。

村松村では年に三度開かれ、1月15日にも市を設けることが許されていた。郡方役人はこの市に立会うがこの留には次の如く書かれている。「十三日より御引続、十五日八きぬ類御法度二相成候由二而、年毎二三拾ヶ年ほと己来御立会被遊候、博奕共へ御制布被遊候事。」とあり村松の市は宝暦の頃

から開かれていた様子である。江戸農民の2大楽しみの一つといわれるものは博奕と酒であるが、こうした大勢の人の集会の裏では博奕が横行していたのであろう。在地郡方役人は種々農民の動きを監視していた。また村役人や御山横目も宿内を14日夕から見廻りし、15日には近隣の御山横目まで呼び出し宿内の監視を続けた。また、留には「御城下御筋より忍廻り御指出シ被成候事」とあり、人々が平穏であるようにと藩役人も村役人も立ち働いていたことがわかる。

2、ヤンサマチ

村松大神宮にはヤンサマチと呼ばれる行事が古くからある。このヤンサマチは御輿の磯崎浜への浜降りと競馬という2つから構成されている。

「石神組御用留」には、藤田次郎左衛門（浜田組郡奉行）から加藤孫三郎への書状がある。4月3日付けの書状には、「去る九日村々の鎮守明神磯出の所、若もの共花美之着服いたし候不心得之者も有之由相聞候間、忠次郎殿（常葉組郡奉行）へも御申合致候-----御扱下よりも村々へ御達可被下候-----」と触文が出されており、この文面から磯出が3月9日に行われている事と、若者共の衣服が華美になっていることがわかる。「石神組御用留」に於けるヤンサマチ（村々鎮守磯出）について書いてあるのはこれだけである。

尚、ヤンサマチに関しては東海村史・民俗編に藤田雅一氏により詳述されているので参照されたい。ここにその一部を伝えるが、この浜降りの儀礼と競馬とを整理したのは光圀公と言われている。

2.1 浜降り『東海村史・民俗編』

当村から磯崎浜への参加神社は、村松大神宮・須和間住吉神社・白方埴田宮（豊受皇大神宮）・石神住吉神社の四社であるという。白方埴田宮には元禄13年の記録が残されており、それによると4月7日に行われ、村々産子行列の次第と浜降りの内容が書かれている。

まず酒列磯崎神社での行事があり

次に神輿が「神石上」に置かれ

「石座」で神楽を奏し

「石座」に膳を供え

祓いの儀式

祝詞

「清浄石」へ神輿が神幸し神楽を奏し祝詞神門石

環幸し「石座」へ神輿を安置するとある。



清浄石とは（別称護摩壇石または阿字石）と呼ばれるものである。「俗ニ護麻壇石ト云ウ。其状護摩壇ニ似タルヲ以テナリ義公此名ヲ悪ミ更に清浄石ト名ツケラレタリ」と「平磯志」にある。この阿字石（護摩壇石）から村松五所明神（大神宮）と埴田宮（豊受皇大神宮）の神が誕生したとの伝承を伝えている。しかも埴田の宮の誕生は4月7日とあり、この日に神の示現が勅使と内侍により確認されたと「村松山大明神縁起」にある。

この祭礼に神輿を出す神社には常陸二ノ宮である瓜連の静神社があるが、静神社も村松大神宮と同様

に神が阿字石に白蛇として現れたという伝承を共有している。

神祇の浜降りの本質は、この地での出現神話の再現することにあつたといえる『東海村史・民俗編』。村松大神宮と静神社を中心として参加する神社は、33 から 48 ケ村ぐらいがあつたようである。

2.2 村松競馬

神輿の渡御と共に村松競馬というもう一方の行事がある。伝統的神事を基盤として形成されたものといはれ、神事の主体が村松大神宮にあり、酒列磯前神社には源頼朝が神馬を寄進した伝承が『那珂湊市史料第一集』にある『事跡雑纂』巻十四「中村雑話」に「同書寛永のころマテ八村松ノ競馬之時期神の馬場ニテ四十八ケ村より四百疋モセメ馬アリ」とみえる。『東海村史・民俗編』。こうした従来の形を整理した形で光圀公の関与により内容が調えられたのであろう。

この競馬は村松社中から出発したが、(後に六町先の富士山下に変更) 寺社方郡方の立会のもとに行われるようになった。出走する馬は 6 頭。長砂(横道坪) 3 頭、高野 2 頭、須和間 1 頭の割りで行われる。元禄 10 年には競馬装束が光圀から下賜されたとある。競馬は、本来神威を知るための占いである。6 頭の馬に乗った男達は手に鉾を持ち磯崎酒列神社の坂下にある鉾突場に到着した順から鉾を突き刺し、一の鉾は豊年満作、二の鉾は浜大漁、三の鉾は家内安全、子孫長久と言われている。

その後酒列磯前神社に参詣し、村松大神宮へ帰ってくるという。

『東海村史・民俗編』では「元禄 9 年義公村松大神宮の競馬を観る。超えて明年命じてその祭典を再興せしめ頗る奨励する所あり。爾来各村競うて馬を走らせ馬匹を精選し以て神馬に供ふ。」とあり、光圀公は磯前浜にて競馬を上覧されている。

また、「文化弍年丑村松西方村御用留」には

競馬順々	壱番馬	弍番馬	高野村
	三番馬	四番馬	六番馬
	五番馬		長砂村
			須和間村なり、

とあり更に次の如く続く。

「四月八日寺社方御立会河野与衛門様御入に付き御見舞申上候、同九日祭日雨天に付御見舞申上候所、御延に成候、同十日雨天にて十一日快晴致候内にて競馬乗合相済候」とあり、4 月 9 日に行われる予定の祭りはやっと晴天の 11 日に実施されたことが知れる。

更に留には競馬の刻限が年増に遅くなっているので、拘りの村々が相談のうえ改革を御係りの井坂新三郎様に申し込んでいる。それによると、「郡方の御調役武田伴衛門様へも相伺ったところ、正四ツ時(午前 10 時半頃)に村松着、神輿等迄急ぎ暮六ツ(午後 4~6 時)には太古之通奉供の者共村々へ相帰り申候」とある。若者は楽しい祭りを派手にやりたいと思う、一方大人達は祭りを早々に切り上げたいと願っている。

また、寛政 12 年(1800) 長砂村より郡奉行に対して「競馬願下書覚」(照沼家文書)がある。これによると横道村は馬 3 頭を出すことになっている。しかし横道村は元禄 12 辰年に長砂村と合併し、横道坪となっていた。「かつては軒数も多かったが今では立百姓が 24,5 軒となつてしまい、それまで

は競馬に馬を出して来たが困窮^{いよいよ} 弥 増し困窮郷となり、自分の村には駆け合いになりそうな馬は1匹もない。そこで遠近郷の4,5里四方を訪ねて早走の馬を見付けたら借り受けて、馬はそのまま翌年まで置いてもらい、時々馬に乗ってみたりする。当日かっこ悪い馬にならないように荷物等もあまり付けないように頼み、4月2日には馬をつれて来て馬見せを行う。競馬の当日まで1頭に2、3人の馬番が付き世話をする。この頃は「年々苗代時節^{かたがた} 勞 以難渋仕候」とあり、馬当番になった家々は、4月9日に神酒やお供物、その他の物入りで大変である。また、馬の乗鞍等5、7年廻りに仕替しなくてはならず、手綱や腹帯等も年々仕替えなくてはならず、大変である。馬を出す村には除地が置かれ、草飼場三反六セ式拾歩が野錢地とされているが、近年これが焼野になってしまい、却て野錢を弁能するようだ。また、中田壱反壱セ廿六分を下されているが谷津田之儀に付、入作では2俵位しかとれず、手作りにして4俵の取実があるが種等を取ると2俵位になってしまう。そこでお願いします、「防風御立山の残りの悪木と新防風御立山の浜表の空地を何とぞ御仁恵の御意を以神領に仰付られ下置かれれば、競馬組合之者共は申上るにおよばず村役人乍恐一同奉願上候」とある。華やかな祭礼の裏側は行事を必死に支え息を揚げそうな農民達の実情がみてとれる。

3. 旱天の祈願と大雨

3.1 ヘイサラバサラ

農民にとって作物が豊かに実ることは最大の喜びであり生活の安定につながる。但し、なかなか天候が農民の思い通りになるとは限らなかった。「文化六年石神組御用留」には、水戸に役所がある藤田次郎左衛門と小原忠次郎の連名の6月16日付、8郡宛の廻状がある。それには「打続き雨が降らず村々が困っているので、静と吉田神社で五穀成就之祈祷を両名で昨日申出たので承知してほしい」とある。また追伸に「ヘイサラバサラの玉を借りて洗申 御座候」とある。ヘイサラバサラとは、広辞苑一版によると（Pedra Bezoar.ポルトガル語から転じた）牛や馬の腹の中から出る結石、赤黒色で解毒剤として用いられた。馬石記には「かの馬玉の記に和漢にて鮮答^{きんとう}といひ天竺にてヘイサラバサラといふ、或は旱魃^{かんぱ}に雨を祈ると応あるなどいへることあり。」とありまた「鮮答^{きんとう}」の項には「馬・牛・羊・豚等の胆石または腸内の結石、午黄・馬の玉など、ヘイサラバサラ・ドウサラバサラ」とある。現代で言う胆石とかであろうか。動物の体内から見つかる結石は当時はかなり珍しい物として、古くからの不思議な力があると考えられていたのであろうか。この玉を洗うというのも降雨を祈る儀礼なのだろう。静や吉田神社にこの玉を持って行ったかどうかは不明である。ヘイサラバサラについては『水戸紀年』文化元年に次のよう書かれている。「六月炎旱 公^{はるもり}（治保）ヘイサラバサラトイウ名宝ヲ宝庫ヨリ出シテ郡宰に命シテ雨ヲ寿ラシム」。ヘイサラバサラの玉は普段は藩の宝庫に納められ旱天が続くと藩主自ら庫より出し郡奉行に貸し与え、命じて降雨を祈らせたことがわかる。このことから文化元年と文化六年は旱天でヘイサラバサラの玉をお借りして雨降りを祈ったことがわかる。

3.2 真弓山雨乞い

照沼家文書によると、「文化2年村松西方村御用留」には真弓山への雨乞いが見える。

「鑑 百七十七文 是は御陣屋様二而八、真弓山へ雨乞御頼被遊候由二而十三日より十七日御頼被成候節、五文三文ツツ村内より寄代参二くミ頭百之衛門外庄十を遣して、百文八初尾を上ケ御札ヲ頂戴致、外真弓山へ小遣二遣シ・・・」との記録がある。更に、7月22日卯下刻（午前7時過）代人小山田儀衛門殿・長山文之衛門殿とあり、御陣屋の役人が真弓山へ雨乞いに行く時に、村内からも1軒3文5文と持ち寄り組頭外1人が供に代参した様子が知れる。この山は常陸太田市にあって、阿武隈山脈の南端に位置し、海拔329メートルの霊峰上にあり、漁業や農業に携わる人々の篤い信仰を受け、常陸太田市域外からも多くの参拝客があった。

『久慈郡郷土史』には、真弓神社とは水戸城の東北（鬼門）の方角にあたり、常陸の比叡山と呼ばれ水戸徳川家守護の霊山とされたとある。

当村には、かつて「お真弓様」と呼ばれる豊作祈願の行事が石神外宿坪に伝えられていた。家の庭地に真弓山の方に向けて小棚を結い、その上に供物をして祈願した。旧2月15日と16日が真弓神社の例祭であることから、この頃に春の予祝として行われたものと思える。更に「文化3年村松西方村照沼兼帯庄屋御用留」には照沼村の者が旱天にて植苗が枯れ御救を願う文書がある。文化元年や6年程ではなくとも旱天に農民が泣いていた事が知れる。

3.3 雷神様（村人の降雨願い）

村内には何か所も旧村社境内に雷神様が祀られている。水戸神応寺にある別雷皇大神から勧請し身近に祈ったものと思える。『水戸紀年』文化2年には次の如く書かれている。「府下神応寺雷別皇大神ノ寶物錢二百二三十貫文米穀五十五苞ナリ近年世俗大ニ此神ヲ尊敬ス遠近来リ拝スル者多シ、雷ヨケノ神ト云或ハ兒を産ヲトリコト云ニナスモノアリ」とある。神応寺は時宗の寺で藤沢道場から発展した寺である。この寺にある蹴上観音は雷除けの仏様で、雷神の別雷皇大神が昔は同じ境内にあり、この雷神は雨乞いの神だという。雷に伴う閃光を稲妻というが雷雲のもたらす雨が稲の成長に欠かせないものなので稲妻といい、ツマは添えものであるという。『祖神・守護神』（川口謙二著） 農民達は旱天になると水（雨）を求めて村内の雷神様の小祠に祈る。重大な事態になると水戸まで出かけて、水戸別雷皇大神から御水を戴いて来る。この受けてきた水は道中下へ置くことは許されなかった。これ等神社への参拝は、後に代参講や代参となり水戸別雷神社・真弓神社・静神社・磯崎神社・村松虚空蔵堂などの神社や寺へ参拝した。

講や代参は地区毎の人々で結成され、春4月1日と秋9月1日に代表者が参詣しお礼をうけて来た。不参加者はそのつど講中決議によって定められた罰金を果せられ、この罰金によって諸費がまかなわれた。代参から帰ると年番の家で「オヤマイワイ」が行われた『東海駅そのあたり』佐久間勇著 また、水戸別雷神社（南）・真弓神社（北）・静神社（西）・村松大神宮や磯崎神社（東）にお参りすることから四方参りとも称されて長く土地の人々と共に継続されて来た。

3.4 大雨被害

文化6年8月23日 加藤孫三郎書状には「当月廿三日大雨夜入候而八大嵐ニ罷成 北風 之節八別而烈敷、翌廿四日二相成候得へ八、久慈川（水増） 其外坂上郷筋小川々迄出水仕候得共、いずれも中水故田畠共に土地方へ相障候程に者無御座候」とあり、稲は実った後なので晩稲のみ少し障りのある村があるかも知れない。畠は粟・稗・荳・蕎麦・綿へは惣石共に3、4分位より五、6分と見えると言っている。

その他に山林被害が報告されている。この大雨によって人的被害があり、竹瓦村の百姓藤三郎と勇介は、大雨の翌 24 日に大水により上流から流れてくる流木を拾いに行き水死した。勇介の死骸が見つからないが、これは溺死に相違ないであろう、という加藤孫三郎の覚書がある。その後勇介の死骸は 9 月に村内の川除杭に引掛って砂をかぶっていたのが発見されている。また、石神豊岡村の清兵衛が 25 日久慈村へ塩売りに出かけが、久慈川が増水のため渡し船が休みで、そこで同村の知り合いの与次郎に頼んで小船を出してもらった。ところが折悪しく満潮と重なり舟は転覆して 2 人共水死し、死骸は川口で見つかったので親戚の者へ渡した。という加藤孫三郎の書状もある。

田畠の被害は割合少なかったものの村人 3 人もの働き手を大雨後の増水で失ったことになる。

4. 出産

「石神組御用留」には、5 月 11 日付で「昨十日夜妻安産、次男出生二付定式通り産穢相引候、此段御届申候 以上」の加藤孫三郎の届状及び廻状が出されている。更に 11 月 28 日には、小宮山次郎左衛門（紅葉組郡奉行）の「野妻儀昨夜平産（安産）にて女子出産致候二付、定式通産穢相引跡御用権蔵殿（郡奉行見習）へ御無心申候（略）」という廻状が出され、郡奉行の妻達はいづれも安産であったことが知れる。

江戸期には出産は穢のかかることと考え、妻の出産後は、武士の子供の父は 7 日間、出仕などを控えたとされている。これに対し農民の妻達はどうであったのだろうか。

『水戸市史・中巻二』によると、水戸六代藩主^{はるもり}治保は、寛政 3 年（1791）5 月に城中に家臣を集め「産児を^{へい}弊すの悪習」を止めさすべき旨の育子教諭の直書を下している。更に享和 3 年（1803）5 月、文化元年（1804）と育子教諭の直書を矢継ぎ早に下された。

それは、享保 11 年（1726）に 37 万 8 千 475 人いた水戸藩内の人口も文化元年（1804）には 22 万 3635 人となり、9 万 2000 余の減少となったからである。これは荒農地の増大や貨幣経済の発展により市場や浜のある地域への人口流出などにより農村の人口が減少し、良田の耕作すら出来なくなっていたからである。なかでも困窮農民達は、「百姓段々困窮に及び産児を弊すの悪習世上に多くなり、人別も減少致し」という状況になったのである。

そこで、照沼家「文化式年村松西方村御用留」を見ると、同年 3 月に口達の覚えに「育子」が 2 番目の大事と書かれている。

- ・ 農業出精可為致事 但馬為持可申事
- ・ 育子専世話致行届候様可致事

更に 7 月には具体的に次の如く書かれている。

「育子之儀二付而八、殿様より被下置候御直書御預、御廻り之せつ御よミきかせ二も相成候通り之義二而、尊慮之とく備たる所八人倫之道ヲ失イ候儀ヲ深ク御嘆キ被為遊候而、厚ク御世話も被為在養育届かね候ものへ八御救金をも被下置莫大之御仁恵二候、畢竟是も村々人別相減歩役等繁く農業之後レ二相成、面々難儀いたし候所も自然と相直候様被遊たく思召候て之事二候間難有そんし、懐妊いたし候ハ、早速村役人迄申出候様可致候、隠置候而顕レ候如申出無之もの半産（流産）等有之候へ八嚴重之御咎メ被仰付却而面々難儀いたし候、切又若キものなと八懐胎ヲ恥しき事二そんしかくし居候ものも有之由之所、月数重なり候へ者所詮人二知られ候事二而何之埒もなき儀に有之、前々も申通り御咎二も預り候事二候間屹ト申出候様可相心得候」

この様に困窮農民には育子金を与えて何とか人口の増加を狙ったのである。

ここでは、「文化 2・3 年の照沼家御用留」に書かれている農民の出産に係る記述、特に半産（流産）や胎死等に着目し整理してみると次の表となる。

	年代	村名	事象	名前	年齢
	2 年	西方村	半産	きく	記載なし
	2 年	西方村	半産胎死	はつ	40
	3 年	西方村	流産	よえ	記載なし
	3 年	照沼村	胎死	せん	20
	3 年	西方村	半産胎死	とよ	34
	3 年	西方村	出生後死亡	あさ	36
	3 年	照沼村	胎死	あき	30
	3 年	照沼村	半産（胎死）	きん	記載なし
	3 年	照沼村	胎死	なつ	26

半産 村松西方村 組頭 清蔵女房 きく

右の者懐胎致しましたことは、先達て書上げ置きましたが、暑さに当り 18、9 日方より不快になり、白方村郷医玄祝の療治をうけましたところ産気の催があるというので、組頭の義左衛門方へ届け、隣家一同で付添っていましたが行届きませんで、今 24 日明 6 ツ半（午前 7 時前）半産仕りました。右の段御訴え申し上げます。何卒取仕抹が出来ますよう御下知ください。

半産胎死 村松西方村 百姓 茂十女房 はつ 四十歳

右の者 7 月頃から妊娠していましたので、先達て申し上げておきましたが、当二月頃より身体が勝れないので、白方村郷医玄祝に療治を頼みましたところ、熱気が強く出産になるかもわからないので、隣家寄合の上で昨 7 日昼 9 ツ時（12 時頃）に村役人に申し入れ致し、皆で世話を致しておりましたが行き届けかずに、胎死にての出産となりました。尤も去日に生鮎を食べたと聞いておりますので、食い違いにでもなったかと思っています。右の件早速お知らせ致します。文化 2 年丑 10 月 7 日とあり、隣家 3 人の届出書及び郷医の容体書を添えて取仕抹を願っている。

流産 西方村 百姓 三代十女房 よえ

暮の 25 日より病気になったよえは、白方の郷医に看てもらったところ、妊娠していることが判った。本人は妊娠に気付かなかったが昨 12 月より経水（生理）が止まっていることを知った。但し本人は熱気が日増しに強くなるので疫病にかかったかと思った。庄屋は流産になるかも知れないと思い、当月 23 日の懐胎人書上の節事の次第を申上げておいた。隣家や村役人等が付添って看病したが 5 日昼時に、人の形にもならない血の様に下り物（悪露）があった。何とぞ早速に取仕抹を仰付下さいますようお願い致します。

この正月 6 日の流産後次々と記録が表れる。

困窮人初産 胎死 照沼村 百姓 忠三郎女房 せん 二十歳

せんの妊娠に付ては先達て申し上げておきましたが、23 日に、生の鰯汁を食べたところ食あたり気味で腹痛が始まった。懐胎人なので隣家の者より役人に知らせた、来て見ると臨月に見えたので足崎村郷医玄和へ呼人を遣したが折悪しく病家へ出向き留守であった。24 日の朝 5 ツ時頃（9 時前頃）胎死にての出産となった。何とぞ取仕抹を仰付下さいますようお願い致します。と隣家

2 軒と庄屋組頭及び人別役から奉行所へ届けられている。

半産・胎死 西方村 百姓 善十女房 とよ 三十四歳

右の者は丑 11 月頃より妊娠していましたが、昨 18 日夜中に過急に熱が出てしまい流産しそうなので役のものへも申し出ました。村役人も出て来て世話をしたが 4 月 19 日朝 7 ツ時（午前 4 時頃）胎死での出産でした。早速お知らせします。

そしてもう 1 通は、隣家の友七と幸十よりの報告書がある。隣家の 2 軒はとよの妊娠以来朝夕気を付けて見舞っていたが臨月にもならぬ前に熱気強く半産の様子なので村役人に知らせ、医療をかけるまもなく急の強熱で半産をしてしまったと報告した。

これに対し奉行所では組頭清蔵の訴えに対し疑心の筋があると奉行所役人の大内伝吾が来て、5 人組世話人、隣家の者 3 人を呼出し吟味があつた。

出産後死亡女傭人 西方村 百姓 幸介女房 あさ 三十六歳

此者は 2 月頃より妊娠していることは書き上げておきましたが、昨 7 月 29 日夜に次女を安産したが、しかし、8 月 1 日 5 ツ時（8 時頃）に相果（死）てましたことを報告致します。と西方村惣役人より奉行所手代の安島政衛門に届けられている。これは死亡人があさなのか、子供なのか文面から判断しにくいものがある。

胎死 照沼村 五人組世話役 清蔵女房 あき 三十歳

右の者は懐胎しているようにも見えなかったのですが、夜半 4 ツ時（午後 10 時頃）俄に服痛が続くので雪隠（トイレ）へ行くと、胎死の子が生まれました。この家は一軒家同様に隣は独身者が住んでいるが、今は他出中です。忠次郎の母が来てくれたが出産に間に合わず、食事もあるものは食べていませんが、大根の葉の生漬の香の物をもらったと聞きました。本人と村役人も妊娠と月数もまだ判らなく、報告もせず大変申しわけありません。

半産（胎死） 照沼村 百姓 清三郎女房 きん

きんは懐妊をしたので書上をしておきましたが 5、3 日前から腹痛気味なので、子を取上げるのが上手な馬渡村津衛門の女房を頼みました。胎児が正常位でないので少し直してもらい少々気持ち良くなったのですが、腹痛が増して出産気味となり、隣家の者が役人へ知らせた。

村役人が来て医療（医者）に見せようと相談している内、夜前の 4 ツ時（午後 10 時頃）に胎死で出産となった。どうか取仕抹をすることの許可を御願致します。寅 11 月 8 日、照沼村庄屋市郎左衛門、くみ頭太之衛門、同龍次、人別役伊三郎より奉行所へ届出された。また別の届けが、隣家 3 人の名で事の次第を書いた届け 2 通共に組頭の龍次により郡奉行所へ出されている。

胎死 照沼村 百姓 庄十女房 なつ 二十六歳

なつ儀は懐妊の由を申し上げておきましたが、昨 13 日に隣家の者より出産しそうだと役々の者へ届けが来ました。すぐ一同で出かけ様子を尋ねると、昼時夏大根の腐漬を食べた。すると、すごく苦しみだした。医者と呼ばうと思ひ彼是していると夜半に胎死にて出産してしまいました。書付を以って申し上げます。何とぞ取仕抹を仰付下さい。

項の 5 人組世話役清蔵の妻あきの胎死に対しては、夫の対応に対し厳しい叱責がなされている。

胎死の理由は、田からの帰り食違いをした上に重荷を持たせたので、俄に産気づき故障になったのではないかと、女房の妊娠を村役人に知らせもせず、役所から時々申付の事を等閑に聞いているので妊娠 6 ヶ月まで届けも出さず隠置とは不届の仕抹に付禁獄を申し付けるところだが、文公様の

1 周忌なので牢入りは許して閉戸を申し付ける。とある。また庄屋や組頭も不調法之至に付、庄屋は叱押込、組頭は叱捨を申し付けられた。これは文公様御 1 周忌のため軽い咎である。とある。そして清蔵他 5 人組の利八・次三郎・祐吉・利十が妊娠 6 ヶ月になるまで気付かずにおくとは何かと注意を受けている。

文化 4 年頃小宮山風軒がまとめたとされる『水府志料』によると村松村戸数凡 151 とある。実際には村松東方村・村松西方村と 2 村に分かれていたため半分として凡そ 75 軒位、照沼村は凡そ 41 軒とある。他村と比べて多いか少ないかは判らないが、異常出産の数値は前表の通りである。

御用留の届けには、流産と半産、及び半産胎死と胎死に分類されている。

妊娠の状況の月数の少ない方から、流産・半産・半産胎死・胎死と分類され記録されたものと考えられる。現在、流産は 24 週（5 ヶ月過）未満となっており、かつては妊娠 5 ヶ月頃以前で、その状況により流産と半産は分けられた。また胎児死亡（胎死）は、現在では妊娠 36 週（8 ヶ月余）以降からと考えられている。かつて同月数位から胎死と考え、それ以前を半産胎死と記録されたものとする。

これら御用留に見える数々の具体例を見ると、当時の女人は、生理が止まると懐胎届けを出し、流産しそうになればまた届を出し、実際に流産や胎死になると庄屋や組頭からの届けと、隣家からの届けが出され人々が連帯責任を負わされていた様子が知れる。

御用留の中には実生活が見える例は少ないが、このようにこの時期の御用留には当時の女性達の厳しさが行間から見えかくれしている。当時の女性達が「生む性」を厳しく管理されている現実を知って貰いたいと思う。

おわりに

今回、文化 6 年の「石神組御用留」を解説し、その中から民俗的要素を含んだ内容を報告することになり整理したところ、テーマとしては多くの知見が見つかったが、残念ながら具体的な中身になると報告するほどのものとはならなかった。そこで、最近見つかった御山横目であった照沼家の文化 2 年・3 年の御用留などを調べ内容を補足してまとめて見た。これら御用留は、農民を良く知る立場から書かれているので、実に詳細に記録している。例えば文化 2 年の御戸開きでは村松西方村庄屋も村松東方村庄屋も共に倅を出席させており、代替わりの準備の為に、庄屋として後々の行事執行に困らないようにと細かく記録されたのであろうか、前後の経緯も含めて実に良く書かれている。本当にありがたいことである。このような事実に対して本来であれば更なる考察を加えるのが好ましいのであろうが、歴史的に経験の浅い私どもには難しく、成るべく事実を書くことに努め纏めてある。しかし当時の村松大神宮や虚空蔵堂の様子、それに係る、郡方・寺社方役人や庄屋を始めとする村役人や農民の息吹はなるべく記載したので、これらの事実がこの出版によって少しでも関係者に伝えられれば幸いである。今回の執筆に当たり高橋裕文先生を始め河本紀久雄氏や古文書を読む会の仲間からも多くの応援をいただき感謝に耐えない。照沼家で見つかった文化 2 年の村松西方村御用留は現在「東海村古文書を読む会」により解説中であり、以後も継続的に解説は続くので、順次何らかの形で公開できることを願っている。

最後に瑣末な内容に終わったことをお詫びして筆を置きたいと思います。